

# FILM RED 炎の剣士

ジャンカー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界の終焉を目撃し、その後の物語を紡ぐことで世界そのものを修復した英雄、神山飛羽真。目が覚めるとそこはある歌姫がライブを行う直前で……

最強の剣士と歌姫、未来の海賊王3人の運命は如何に！ 壮絶な力を巡るクロスオーバー！

# 目次

炎の剣士、ライブと麦わらと	1
# 2 変わる表情、変わらぬ関係	12
逆光、怒りと焦り	22



# 炎の剣士、ライブと麦わらと

目が冷めるとそこには曇りなき青空が広がっていた。

いつもなら寝室の天井が見えるはずだが、それはどこにもない。

「……………は……………」

男が放った第一声、それは当然の反応だった。見た事も聞いたこともない街。周りの人々は男を見てどよめいている。

男は右手に赤い剣を握り、鞘(?)のような物体を腰に巻いている。

「おいあんちゃん、これ…あんたのか?」

そう言つて一人の中年男性が差し出したものは、『B r a v e D R A G O N』と書かれた手の平サイズの本。

「…あ…ああ、ありがとうございます。…すみません、ここつて…?」

「……………あんちゃん頭でも打つたのか?…ここはブレイア島シツク街」

その小さい本を受け取りながら男性に質問をするが、全く聞いたことが無い土地だった。そんな島、地図のどこにも記されていない。

続けて男性はこう言った。

「かつての王国、エレジアに一番近い島だよ」

「エレ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？」

またしても知らない国の名前に男は混乱していた。周りの人々は興味が無くなったのか、一人、また一人と離れていく。

「なんだあんた……物騒なもんも持って……本当に変だなあ……じゃあ、あのプリンセス・ウタがライブをやるっていうことも知らんのか」

「プリンセス……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～ライブ……：：～ああ歌姫か」

「ところであんちゃん……名前は何？ライブに行くんなら送ってやらんこともないが……」

男はライブには興味は無かった。しかしそこに行けば大勢人がいる、何か情報を得られるかもしれないと思い男性に頼み込む。

「俺は飛羽真……：～……：～神山飛羽真」

男が放った名、それはかつて全てを救った英雄の名であった……。

飛羽真は波に揺れる甲板に立ち、澄み渡る青空を見上げていた。

なぜこうなったのか、見当もつかない。思い出すようにすると記憶に霧がかかるように思いつくことが難しい。すると突然、男性は飛羽真に話しかける。

「あんちゃん、トウマって言ったか……：～……：～なんか、本に出てくる名前みたいだな！あの……：～なんていったっけな？ワ、ワ……」

「ワ？」

(和……?) 日本みたいな名前の国だ。

「ワノ国だ！ そうだよ、言葉の響きがこっちじゃ聞かないもんだからね」

そう言つて男性は船の舵を握る。また、この時代は海賊が蔓延つており、海軍や世界政府も思つた以上には取り締まつてくれないどころか本部から離れればその分暴君のように君臨する海兵もいるらしい。

ワノ国の人(?) というていで話を聞いていると、この世界はより危険な時代だということもわかつた。

「こんなんじや子供たちも安心して暮らせない……」

海賊は物語でも悪として描かれており、飛羽真がいた世界でも彼らは変わらず客船を狙つて金品を強奪する奴らである。身近に思つていなかったものが今現実にある。そう思うと海賊に対して静かな怒りが湧いてくるのがわかる。

男性の話聞き終わり、「少なくとも海賊と俺が元の世界に戻ることは関係はなさそうだ」そう思つていた頃。辺りが霧に包まれていく。

「ほら、もうすぐ着くぞ」

周りには同じようにライブに來たのだろうか、「ウタグッズ」を身に付け参列する人々が目に入る。

「このチケットもな、本当は妻とくるはずだったんだ。でも、海賊に…殺されちゃった……。」

あんたに一枚やるよ、見知らぬあんただが、随分優しい人なんだな。怒ってくれるなんて…」

そう言つて飛羽真に手渡されたライブチケット。受け取る彼の手は怒りで小刻みに震えていた。

飛羽真は、たとえ初対面にでも優しく友人のように振る舞う青年。男性の妻の話を聞くと、「殺された」というこのワードで怒るのは当然だった。その彼を見た男性は、「優しい」、この言葉以外思いつかなかった。

チケットを握り、男性に礼を言おうとその場を後にする。

奥に進んで行くと、ステージが見えるように不自然に配置された岩にある程度くつろげるスペースがある。そこに腰を下ろしライブの開始を待つ。

（何でライブに来ているんだろな。そんなことしている場合じゃないはず…）

それでも、ここにいなきやいけない、何かが自分を待っている気がしてならない。

観客たちがざわざわと騒ぎ始めている。どうやらライブが始まるようだ。

『新時代はこの未来だ。世界中全部 変えてしまえば…変えてしまえば…』

聞こえてきたのは、この世のものとは信じられない程、美しく、力強く、輝かしく、そしてどこかに悲しさが混じった歌声だった。

世界の歌姫・ウタ。彼女の歌声はまさに世界一である。聞いているだけで気分が上がり、幸せな気持ちになるようだった。

このライブに来ている人は一般市民だけではなく、海賊や政府関係者もいる。このまま無事に、楽しくライブが終わると人々は思っていた。ただ一般人だけは。

「みんな、やっと会えたね！ウタだよ！」

彼女がそう言う与会場はとてつもない盛り上がりを見せる。彼女を生で見ることができ、観客たちのボルテージは最高潮に上がる…。

その時、彼女の前に妻わら帽子を被った少年が立つ。彼の名はモンキー・D・ルフィ。今や五番目の皇帝とも呼ばれる新世界で名を轟かす海賊だ。

「お前、ウタだろ」

「え？」

少年は懐かしいとでも言うように「俺だよ俺！」とウタに話しかける。

はっとした彼女の赤と白のツートンカラーの髪、そのうさ耳のような後ろ髪がぴよぴよと跳ねる。

「…ルファイ？ルファイ！」

二人は再会を喜び、お互いに抱き合った。観客はざわめいており、中には彼女に惚れたレベルの大ファンもいるだろうが、大勢などお構いなしにしばらく抱き合った二人。

彼の仲間である者達も二人の関係に驚愕しており、「紹介くらいしろ」「何で仲良しなんだ」など、口々に言い出す始末。

ルファイはにじしつと笑い、

「だってこいつ、シャンクスの娘だもん」

その一言に、会場は驚愕の嵐だった。とうの彼女は呆れたように「ああ、」と声を漏らす。

シャンクス…通称『赤髪』。彼はこの新世界に、皇帝のように居座る四人の大海賊『四皇』の一角。その彼に娘がいた、周囲からすればこの事実はとんでもなく、誰もが驚くのは当然とも言えた。

「シャンクス…四皇…」

遠くからその様子を見ていた飛羽真は聞いた話を思い出す。どんな悪人だろうと、家族がいる。それは今までの戦いでもわかっていたが、いざ「家族」と言うものを考えるとき妻を海賊に奪われた男性のことを考えてしまう。自身の周りにも、家族を大事にしている仲間がいる。息子をもつ者、自らが所属する組織を家族と思い、大切にしている者。「この世界は…思ったより複雑だ」

飛羽真は話を聞くかぎり海賊＝悪というイメージであつたが、家族というものを踏まえると全てがそうではないのではないか、そう思っていた。

その時、何者かがステージに降り立った。

「なんだお前ら」

ルフィは彼らに聞くが、どう見ても海賊。髑髏を模したデザインの高帽子にサーベル、人相が悪い奴ら。彼らは『クラゲ海賊団』

「ウタちゃん、悪いなあ。あの赤髪に娘がいたとは。残念だがライブは中止だ、お前を攫えば赤髪の弱点にもなる！」

船長らしき服装の男、エボシがウタに近づくと。

「他の有力な海賊に引き渡せばいい金になる」

剣を持った船員、カギノテが彼女に向かって刃を突き立てるその時

「熱風拳!!」

衝撃と猛烈な熱風が吹き荒れ、カギノテは吹き飛ばれてしまう。

乱入してきたのは、かの四皇ビッグママ海賊団、オーブン。彼のすぐ隣に「ウィ〜ウィツウィツウィツ」としゃつくりのような笑い声で女性が現れる。同じくビッグママ海賊団の一人ブリュレ。

ルフィはその姿を見て、「お前は…枝!」とはつと目を見開く。ウタは「枝?」と首を傾げるが、とうの本人は「ブリュレだよ!」とツツコミを入れる。

「隣の人は?」

ウタが聞くと、「同じくビッグママ海賊団四男、オーブんだ。楽しそうだな、混ぜてくれよ」と答える。ブリュレの手に鏡のような空間ができ、そこから戦闘員が大量に出現する。

観客は「せっかくのライブを」「また海賊かよ」と次々に文句を言い放つ。

そんな中、ルフィの仲間、麦わらの一味はウタを守るため動き出す。

「おいおい、ウタちゃんを狙うなんてクソ野郎どもは俺が始末してやる」

「素晴らしいライブの邪魔をする不屈きものたちは、黙って見過ごすわけにはいきませんね」

サンジ、ブルックはすぐさま戦闘体制に入る。

「ようやく面白くなってきやがった！」

ゾロはエボシを斬り飛ばすと、それに続いて次々と行動に入る。

「掠り歌——吹雪斬り」

ブルツクも負けじと技を放つ。

サンジも敵を蹴り飛ばし、情けない声をあげ倒れる者もいる。

「全く…しようがないわね」

「ライブはまだ始まったばかりなんだ！」

「やるぞ、ウタを守るために！」

ナミやチョッパーそしてフランキーが加勢のためにステージに向かって走る。

ジンベエは腕を大きく振りかぶる。

「魚人空手・槍波！」

槍のように鋭い水柱はオーブンの高熱を帯びた右手に阻まれ、水蒸気となって消滅した。

「ヌウ、」と唸り声を上げるジンベエ。「後はスーパー任せとけ！」と、フランキーはオーブンに殴りかかる。互いの拳がぶつかりあい、その衝撃で戦闘員は数名吹き飛んだ。

「ゴムゴムの！JET銃乱打!!」

ルフィは高く飛び上がり、技を放ち敵を一掃する。それを讀んだロビンは「百花繚乱・

蜘蛛の華」で海賊達を捕らえる。

この大乱闘の中、狙われているウタ本人は異様なまでに落ち着いていた。

ロビンが敵を捕縛したのと同時に、一人の男が加勢するようにステージに降り立った。

誰もが知らぬ者の登場に顔を見合わず。

手には剣を携え、真剣な眼差しで海賊達を一瞥する。この男、神山飛羽真。

「な、何だお前は？」

クラゲ海賊団の一人が聞くが飛羽真は無視、一言。

「海賊とか、何だかわからないが…一人の女の子を攫うのは人として間違ってる。ライブを楽しんでいる人たちだっているんだ。こんなことはやめろ」

そう言うが、海賊達は「何を言っているんだ」と軽くあしらう。

飛羽真は「仕方がない」と呟き、手にもつ剣：『火炎剣烈火』を腰に装着したドライバーに装填。次に小さいが不思議な力を持つ本、『ブレイブドラゴンワンダーライドブック』を開く。

『ブレイブドラゴン』

『かつて、全てを滅ぼすほど偉大な力を持った神獣がいた』

まるで物語の始まりを示すかのような声が響き、ブックがドライバーのホルダーに装

填されると彼の背後に巨大な本と赤い竜が出現する。

「なな、何だありやあ！」

ウソツプは目の前に起きていることが不思議でしかならなかつた。見たことないものに、幻想の動物。彼も悪魔の実の能力者かと想像する。他の面々もそうだったのだろう、互いに攻撃が止んでいた。

「変身」

飛羽真が眩き、剣を引き抜くと『烈火、抜刀！』と聞こえ彼の体が炎に包まれる。

『ブレイブドラゴン！』

現れたのは、赤、白、黒の三色の戦士。その場にいるものは誰も知らない剣士。

しかし彼はこう呼ばれている——世界を救った英雄、仮面ライダー、又の名を——

「俺は仮面ライダー、セイバー。炎の剣士だ」

## #2 変わる表情、変わらぬ関係

変身すると同時にセイバーは烈火を構え、オーブンへと歩む。見たところ熱を利用する力か、熱の範囲は？温度は？など注意しながら歩み続ける。

「お前、俺と戦うのか」

「君が一番厄介そうだし、それに何とかかなりそうだからな」

「舐めてくれるな！」

彼の発言に苛ついたらしく拳に熱を込め殴りかかる。セイバーは刀身で受け止め、すぐ右側に衝撃をいなした。

「……いつ」

オーブンの攻撃を軽くないなした彼の剣捌きに真っ先に反応したのはゾロだった。「炎の剣士、手合わせしてみてえもんだ」、そう言いセイバーの戦いを見据える。

「高熱なら、烈火に熱が伝わるのは当然のことだ。わざわざ熱いものを触る人はいないよ」

「俺の熱を『熱いもの』呼ばわりとは、舐めてくれるんじやねえか!？」

オーブンが再び拳に力を込めた矢先、セイバーはすかさず銀色のブツクをドライバ―

に装填、瞬間ステージに火柱が立つ。観客達はただ見守っているしかなかった。ステージ上にいた海賊たちも、自らの知らない戦いに興味を示していた。

『すなわち、ド強い!!』

炎が切り裂かれ、斬撃がオーブン目掛けて飛ぶ。腕をクロスさせ攻撃を受け止めるが、その重い衝撃に耐えきれず軽く吹き飛ばされてしまう。

燃え盛る炎が消え、中から現れたのは先ほどと違う姿の剣士。全体がシルバーであり、西洋の甲冑に似たデザイン。左腕には竜の頭部を模したものがついている。

仮面ライダーセイバー・ドラゴニックナイト。セイバーの進化した力、姿を見て喜びの声を上げる者がいた。

「おおおおおスッゲー！」

「カッケエなあ〜！」

ルフィとチョッパーは甲冑姿に興奮している。姿を変えたセイバーを見てゾロの口角が上がる。同じ剣士として興味津々だった。

「姿が変わろうと！」とオーブンが飛びかかるが、セイバーは烈火に力を込めて彼へと斬りかかる。

炎はオーブンを飲み込み、彼の熱風拳を包むように無効化。

その様子ルフィ達男組は目を輝かせ、ヒーローショーを見る子供のようにはしゃい

でいる。

その時だった。

「はいそこまで！」

二人の目の前に音符が出現し、お互いの攻撃が止んでしまった。乱闘に終止符を打ったのはなんと、争いの渦中にいる少女、ウタだった。

「みんな喧嘩はおしまい、みんな私の歌を聴いて楽しくなる？」

「何だと？」

「生意気なことを言うガキは顔を引き裂いてやろうか」

海賊の戦いを喧嘩呼ばわりされ、眉間に皺がよるオーブン。ウタに対し猟奇的な発言をするブリュレ。しかしとうの本人は顔色を一切変えない。

セイバーは疑問に思った、なぜここまで余裕があるのだろうか。いくら大海賊の娘とはいえ肝っ玉が座る所の話じゃない。自分を狙うものがあるこの場で動じないのか。彼女には何かがある、そう思った時だった。

「じゃあ、歌にしてあげる」

そう言い放ち、彼女は歌う。『私は最強』、気分が高揚する曲調に彼女の歌声が加わればまさしく『最強』の音楽となる。

みるみるうちにウタの衣装が変化していく。ミニスカートの衣服は白いハイレグに

なり、黄金色の鎧が手足に装着されていく。加えて巨大な槍と盾が出現し、彼女はそれを装備する。

観客達は彼女の曲に大盛り上がりだ。

彼女が歌っている間、オーブンはウタに攻撃するため飛び上がり、それをルフィが迎撃しようとする。しかし二人の間に五線譜が現れたちまちまちオーブンをや他の海賊達を縛り付ける。気がつくのとあつという間に海賊達は五線譜に貼り付けられ、無力化してしまつた。

その様子に観客は大興奮。海賊達にも臆せず戦う様は圧巻だつた。

彼女が歌い終わるとルフィ達は安心して戻っていく。飛羽真も変身を解除し、戻ろうとするが腕を何者かに掴まれる。見ると麦わら帽の少年が満面の笑みで一言、

「お前、俺の仲間になれよ！変身鎧！」

飛羽真は拒否、というか「何？」と言う暇も与えられずルフィにひっぱられていく。その様子を見ていた彼の仲間やウタは苦笑。ウタに至っては少し悲しそうな目でルフィを一瞥した。

「ちよつと、引つ張りすぎだ……」

やつとルフィの動きが止まり、彼らの観客席に落ち着いた飛羽真がやつと出た言葉はそれだった。

「で、お前何者なんだ？」とルフィ。何者かわからずに勧誘するのか、と少し呆れる飛羽真。

「俺は小説家で剣士だ。あと」

飛羽真は続けて言う。

「俺は海賊の仲間になる気はないよ。今ので君たちが悪い人じゃないとわかったけど、俺にはやるべきことと、帰る世界があるんだ」

最後の言葉に反応するロビンとブルック。

「世界って、どういうこと？」

「いや〜お兄さん、何か事情があるみたいですね〜。それにしてもすごい剣技でしたねヨホホホ」

「確かにあの剣技は見たことなかった、炎を斬るのはアイツだけかと思ってたからな。おいお前、名前は」

ゾロも飛羽真の戦いをほめ、名前を聞き出す。飛羽真自身も名前くらいは教えても良いと、自己紹介をする。また、違う世界から来たことも伝えた。

「へエくじやあ物語を書くのね！」

「俺様の勇士も負けぢやいないなぜ〜！」

「なあなあ、聞かせてくれよいい話！」

ナミ、ウソツプ、チョツパーが彼が小説家であることに興味津々。対してロビンやジンベエは元の世界に戻る方法を考えてくれている。

「よかつたら飯食ってけよ、何か好きなもんはあるか？」

違う世界の住人に料理の腕を振る舞うサンジ、烈火や変身に興味を持ったゾロ、フランキー。そしてより一層仲間に引き入れようとするルフィ。

「どうやってこんな剣が出来上がるんだ？何かスーパーステージ機械なのか？」

「その剣、ちよつと貸してくれねえか？いつか欲しいと思つてたんだ、『炎分ソード』」

「え、炎分……？」

一味たちの空気にすっかり取り込まれた飛羽真。変わらずルフィは「仲間になれ」「ヒーロー何だろお前、俺はヒーロー好きだぞ」「炎なんてエースみてえだなあ」と、誰よりも興味を持つて話しかけている。

「本当に悪いけど、元の世界に帰らなきゃいけないんだ。仲間が待っているし、俺の生活があるんだ。誘つてくれて嬉しいけど…」

柔らかく断りを入れるが引き下がらないルフィ。こんなにもいい人たちが海賊だと信

じられない。それに仲間になると言うことは自らも海賊になり、犯罪者として生きていくことになる。それだけは絶対嫌だと誓う。

「やつほールファイ！楽しんでる？」

上から例の歌姫が降りてくる。彼女はルファイの仲間になんか挨拶をし、一味はウタに感謝を述べる。

「珍しい食材もあるからね、ここは天国さ」

滅多に見えない食材に目を輝かせ料理に勤しむサンジ。他の面々もウタのライブを楽しんでいる様子だった。

「ルファイやお友達、その人もさつきはありがとうね。守ってくれて」

ウタは飛羽真に目を向ける。

「いや、あの場合は当然と言うか…君、強いんだな」

「そうだよなウタは昔より強くなっちゃまって！」

ルファイは懐かしい、と言葉を漏らす。

「そりゃ私の方が強いのは当たり前！…ねえ久しぶりに勝負しない？」

「今の俺には勝てねえよ」

ウタはルファイと昔と変わらず話しかけるが、彼に軽くあしらわれてしまう。

「私の183連勝中だもんね〜」

「違う！俺が183連勝中だ！」

二人の言い合いは微笑ましい。飛羽真は二人の幼馴染を思い出していた。

「ねえ、本当にこれで全員？」

「全員だ」

ルフィはそつげなく答えるが、彼女はなぜか急いでいる様子だった。

「勝負しようよ」と持ちかけるウタ。

「今日の種目はこれ！チキンレース！」

ウタが指をパチンと鳴らすと空中に直線のコースと皿に乗ったチキンが現れる。

二人はそのコースに飛び乗り、準備運動を始める。

「懐かしいなあ〜！後は…」

「大丈夫、ちゃんと用意したから！」

そういうと二人の背後に大牛が出現、準備万端と言わんばかりに鼻息が荒い。

「3、2、1」と二人の合図で勝負開始。順調なスタートを切ったルフィだが途中、ウタは「ジュースあげる」と巨大なコップに注がれたジュースを出し、彼に差し出す。「サンキュー！」とまんまと彼女の罠に引っかかったルフィ。その隙に彼女はチキンを完食しその場から退避、ルフィは牛に突き飛ばされてしまった。

「ウタの勝ちだ!!」

ウソツプの声と歓声をあげる一味、飛羽真。しかし肝心のルフィは海に落ちてしまっ  
た。

「あ、海はヤベエ」

ウソツプは救助しにこうとするが、ウタは能力を使い彼を引き上げる。

「ごめんごめん、ルフィも悪魔の実を食べたのね」

「ずるいぞお前、俺は負けてねえ！」

「出た、負け惜しみ〜！」

ウタは手をワキワキさせ、ルフィに笑みを送る。

「勝ったんだからシャンクスの居場所教えてよ、だってその帽子」

「しらね、預かってる」

そう答えた彼にウタは不満げな顔をする。

「…ねえ、ルフィは今何やってるの？」

「決まってるだろ、海賊だよ」

その時、楽しかった空気が一変したのを飛羽真は感じとった。

「そっか……海賊……か……」

ウタの目からは光が消えたかと思えば、衝撃的な一言を発する。

「ねえルフィ、海賊やめなよ」

二人の会話を聴いていたゾロが真つ先に顔をあげ、ウタを凝視する。

「ちよつとルフィ！」

彼女の一言に反応せず、ルフィは船に戻ろうとする。

「お前がやりたいこと見つかつてよかった。元気そうだし、頑張れよ！俺はサニー号に帰って寝る！」

一味全員が帰りの支度をし、船に向かおうとする。

飛羽真は異変を感じとり烈火を握りしめる。

ウタはかかをとをドスドスと鳴らし、先程と打って変わって低い声で宣言する。

「逃がさないよ、ルフィ。あんたは私と一緒に楽しく暮らすの」

そう言った彼女は、まるで獲物を捕捉した獣のようだった。

## 逆光、怒りと焦り

あんなに楽しい空気は一体どこへ行つたのだろうか？今や彼女は光なき眼でルフィ達を、いや『幼馴染』だけを見ている。それしか見えていないと言わんばかりにその視線はルフィから離さない。

「ウタ、あなたの歌は好きだけど一生つてのは——きやあつー」

「！ナミさーおわ!!」

ウタに意見したナミ、彼女を止めようとしたサンジも五線譜に捕らえられ、上空へ。

「ねえみんな！また悪い海賊を見つけたよ！……どうしようか？」

ウタはそう観客に言う、「妻を殺された」「全て奪われた」「母ちゃんを返せ」と、海賊への恨みのこもった怒声が次々と聞こえてくる。

「ウタ！二人を返せ！」

ルフィのそんな言葉もウタには届かない。「ルフィが悪いんだよ。海賊だなんて言うから」と、まるで彼が『海賊』であるから仲間を捕らえたかのような言い方だった。

海賊嫌いの歌姫、世間でそう言われている彼女は観客の期待に応えるため戦う。ウタが合図をすると音符が出現、槍を持った兵士『音符の戦士』へと変化する。

「いくらルフィの幼馴染でもこいつはやりすぎだぜ！」

ゾロは刀を抜き、戦闘態勢へ。他の一味も同じく音符の戦士に応戦している。

「お、お前——いや…やめだ。乗らねえ」

拳を構えたルフィはすぐに構えをやめ、帽子を深く被る。

「戦う理由がねえ」

「あんたがやらなくても、私はやるよ」

二人の間には、少しの間沈黙があつた。哀しそうな目をした後ウタはステージ上へと戻り、歌う。

「——散々な思い出は悲しみを穿つほど」

『逆光』、海賊や悪党への怒りを込めた激しい曲調の歌。彼女の力強い歌声に感心している場合ではないが、いつまでも聴いていたくなる程引き込まれる。

「なんで…こんなことになるんだ!!変身!!」

飛羽真は烈火を抜刀、ドラゴニックナイトへと変身する。

『Don't miss it! (The knight appears. When you side), ドメタリックアーマー! (you have no grief and the flame is bright.)』

ドハデニツクブースター！ (Ride on the dragon, fight.)  
ドハクリヨツクライダー！ (Dragon knight.)

ドラゴニツクナイト！ すなわち、ド強い！』

「うおおおおお！！」

雄叫びを上げながら音符の戦士を斬り捨てていく。彼らの槍が刺さるが、ドラゴニツクナイトの装甲『シルバリオンスケイル』の前では歯が立たない。邪悪な敵は触れることすらできない特性を持つこの鎧に触れることができる戦士に正直驚いた。と言うことは、彼女の思いは邪悪などではなく、単純な『海賊への怒り』そのものだったと直感する。

『ドラゴニツク必殺読破！ ドラゴニツク必殺撃！』

ブツクを2回押し込み必殺のキツク技、龍神鉄鋼弾を放つ。受けた敵は爆散するが、すぐさま音符へと戻ってしまう。

「これじゃキリがねえな…」

ゾロが弱音を吐くレベル、それほど敵は無限に湧き続ける。ついには一味全員五線譜に捕らえられてしまった。

残ったのはセイバーだけ、一人ひたすらに敵を斬っていく。左腕の竜の頭を模した武器、ドラゴニツクブースターに烈火を読み込み必殺を放つ。

『スペシャル！ふむふむふーむ…』

完全読破一閃!!』

「豪火大革命!!」

巨大な炎の斬撃を放つ。その斬撃はウタに向かって飛んでいくが、彼女はそんな攻撃をものともせず歌い続ける。

ルフィあつけなく捕まってしまった。

「はあ、はあ…なんで…なんで友達を！」

「あんたは海賊？違うよね、でもあたしの邪魔をしないで。新時代の邪魔をしないで」

「新…時代……」

彼女は飛羽真を後にしルフィへと近づく。

「ルフィ、あたしの友達なら海賊は諦めて」

「返せ！俺の仲間!!」

縛られても仲間を心配する彼には、なんとも言えない魅力がある。危機に陥っても仲間を大切にする様子はかつてセイバーも同じだった。強敵・ストリウスとの戦い、世界を救うため仲間達と決戦に赴いた時、自身が傷ついても仲間を諦めなかった。セイバーはルフィを救出しようとステージに向かう。

「邪魔しないでって言ってるでしょ」

ウタはそれを逃すはずがなかった。セイバーからドラゴニックナイトとブレイブドラゴンのブックを強奪。変身が解除され音符の戦士に襲われてしまう。

「この本？がなかったら何もできないんだよね。しばらく預かってるよ」  
「返すんだ…ブックを…っ！」

音符の戦士に蹴られ、槍で殴られながらもルフィへ向かおうとする。飛羽真はルフィを、彼の仲間を諦めきれない。そんな様子を見て彼も焦りを感じる。

「トウマー……やめろウタ！俺の仲間に手を出すな!!」

彼女はその言葉を聴いて、より一層哀しい目でルフィを見つめる。

「だめだよ…ルフィが海賊なんて。」

「返せ！俺の仲間ア！」

「……………どうして私の側にいてくれないの」

すると、ルフィの体を縛っていたものが解け、彼は即座に起き上がる。

「ウタ！俺の仲間……アあ」

「ウタちゃんに近づくな、海賊！」

「海水に浸かった能力者なんか怖くないぞ！」

ルフィに海水をかけた女性や、農具を武器に彼に近づく数人の観客。ルフィが危機に陥ったその時！彼に救世主が現る。

「バリアボール!!!」

彼と、その人物の周囲に青い透明な球状のバリアが出現。

指を結び、緑髪でトサカのような髪型が特徴の、人相の悪い男が助けに入った。彼の名はバルトロメオ。バリバリの実を食べたバリア人間。そのバリアはいかなる攻撃も通さない、無敵の概念。

ウタグヅズに身を固め、ライブを楽しんでいたであろう服装であった。

「あの男は…?」

飛羽真は急に現れたバルトロメオに驚きながらも、ルフィが無事であることに安堵した。

「ロメ男…?」

「ルフィ先輩、なんだかウタ様はヤベエベ…勝てる気がしねえべ」

その瞬間、ステージ上から飛羽真がいた場所まで青い色相に空間が変色。瞬きの一瞬にも満たない速さで彼らは消え、かわりに岩が出現した。

「…なんだ、他にも海賊がいたのか」

ウタは怒りで爪が手のひらに食い込むほど拳を握りしめる。

「私のルフィを、取り返さなきゃ」

「どこだべ!?ここは」

「あの一瞬で……ここは城の跡地……?」

「いや、助かった!サンキューな、トラ男!」

見ると、白黒で豹柄の帽子を被った青年、トラファルガー・ローがいた。彼の能力は異常なまでに便利すぎる。オペオペの実、改造自在人間。彼の生成したサークル内であれば全てを自在に操ることができる最強クラスの能力者だ。

「ところでお前、麦わら屋の仲間か」

ローは飛羽真を見て一言。

「ああ!俺の仲間だ!」

「あつちよつと、いやでも決まった訳じゃ」

「お前またなんでも勧誘してんのか麦わら屋!……はあ、困ったことになったな」

「な、なんだベトラ男、お前もウタ様のライブを聞きに来たんだったべ?」

バルトロメオはファン仲間がいることに嬉しそうであったが、ローは否定する。

「いや、付き添いだ……ペポの」

電飾にウタへの愛を記した派手なウタグッズを纏い、白熊がローの背後から現れた。

「…え、白熊？二足歩行…」

「なんかすみません」

飛羽真はチョップパーのこともそうだったが、動物が難なく人語を話す様子に驚愕していた。

「しゃべっ…てる？」

「……なんか…すみません」